

この景虎ちゃん（偽）に祝福を！

西行寺桜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

佐藤和真が異世界へ送られる6年前、転生特典として長尾景虎の肉体を得た少女の物語。

▼Fateのキャラは長尾景虎しか出ません。▼和真一行はしばらく出ません。▼作者は小説を書くのは初めてです。読みづらいかもしれませんがご了承ください。

目次

原作開始前

第一話	転生はいつだって胡散臭い	1
第二話	身分証明書いらないのはおかしい	7
第三話	殺しを誇れる訳がない	11
第四話	怪奇！空を飛ぶキャベツ	18
第五話	勝ち目が薄いぐらいが丁度いい	24

原作開始前

第一話 転生はいつだって胡散臭い

余りにも幻想的で不気味さすら感じてしまう空間、そこで二人の少女が向かい合っていた。

「早川優奈さん、ようこそ死後の世界へ。あなたはつい先ほど亡くなりました。残念ながらあなたの生は終わってしまったのです。私は水の女神アクア、死んだ人間を導く神でもあります」

そう言い放ったアクアと名乗る少女はこの世のものとは思えない美貌を持っていた。透き通るような水色の髪と瞳、同じ女から見ても圧倒的なプロポーション、服の露出が多いことを除けばつい拝んでしまいそうな少女。神を自称するのも領ける容姿、そんなアクアに向けて優奈は、

「ソウナンデスカ、スゴイデスネ」

「全然信じてないわよね!? 私は本当に女神なんですけど!」

とても痛い少女を憐れむような目で見ていた。

「いや、いきなり女神を名乗る人はちよつと…。髪を染めていて、カラコン付けて、腋丸出しで、スカート短すぎ。コスプレでもやりすぎじゃないですか?」

「これが仕事着だからしょうがないでしょ! 髪も染めてないから! いわ、このアクア様が神である証拠を見せてあげるわ!」

そう言うときアクアは手のひらを突き出し、その手のひらから水が溢れ出てきた。

「え!? マジックじゃなくて? 本当に水が出てきた?」

「ほら、さわって確かめてみなさい」

「じゃあ、失礼します。…冷たい、本物の水なんだ」

「どう? これで私が女神だってわかった?」

証拠とするには弱いのだが普通はできないことである。優奈は一旦納得し現状を把握することにした。

「あなたが何かしらの凄い存在なのはわかりましたけど、私は本当に

死んだんですか？」

「ええ、悪いけど生き返ることはできないわよ。本来は死んじやつたらそこでおしまいなんだから」

「生き返りに興味はないですけど、私はこれからどうなるのでしょうか？」

「それを今から決めてもらうけど、あなたには三つの選択肢があるわ。一つ目は記憶を消してまっさらな状態で転生する。二つ目は天国的な場所で暮らす」

ありきたりと言えばありきたりな選択肢である。しかし天国的な場所というアクアの言い回しに優奈は首をかしげた。

「天国的って…。浄土宗とかが唱えてる極楽浄土とかではないのですか？」

「大分違うわね。体のない魂だけの状態で暮らすの。だから食べることはできない、物を作ることもできない、昼寝もえつちな事も何にもできないわ。雑談ぐらいしかやることがないわね」

優奈は頭を抱えたくなくなった。どう考えても地獄よりもひどい、天国というよりも虚無と表現した方がいいだろう。あんまりな選択肢に悩む優奈を見てアクアは満面の笑みを浮かべた。

「うんうん、天国なんて退屈な所行きたくないわよね？かといって、記憶を消して生まれ変わるのも、あなたっていう存在がなくなるみたいで嫌でしょ？そこで出てくるのが三つ目の選択肢、異世界転生よ！」

芝居がかった喋り方でできすぎた話が相まって優奈にはアクアが詐欺師にしか見えなかった。携帯電話があればすぐに家族に相談していただろう。優奈の訝しげな視線に気づかないアクアは説明を始めた。

「異世界の中にはドラクエみたいに魔法があつて、モンスターがいて、人間と魔王が戦つてる世界もあつてね、中には魔王軍の侵攻で人間が滅びそうな世界もあるのよ。その世界で死んだ人達の多くは魔王軍やモンスターに殺されたものだからね、またあんな死に方は嫌だってその世界での生まれ変わりを拒否しちゃうのよ。このままだと赤ちゃんが生まれなくて人間が滅んじやうから他の世界の人を送り込

んでしまおうって話になったの」

「随分と人間びいきなんですね。神様だったら歴史のサイクルではよくあることとか言って静観してそうですね？」

「そりゃあ信仰してくれるからに決まってるでしょ。神は信仰がなくなるまで消滅しちゃうの。だから、信仰してくれる人間をできる限り助けてるのよ」

要するに神は人間が好きだから助けているのではなく、信仰がないと困るから、人間に利用価値があるから助けてあげているだけなのだ。そんなことを神であるアクアの前で口に出せばどうなるかはわからないので優奈は黙って話の続きを聞いた。

「話を戻すけど、どうせ送るなら若くして死んじゃった未練タラタラな人をちゃんと生き抜けるように一つだけ特典をあげた状態で送ることになったの。あなた達は人生をやり直せる、異世界人にとっては即戦力。どう？悪くない話でしょ？」

「確認しておきたいんですけど、異世界の言語やお金はどうするのですか？」

「お金は送るときに必要な最低限の分として一万エリスをわたすわ。エリスっていうのは向こうのお金の単位で、価値は日本の円とほぼ同じだからそこまで困らないはずよ。言語の方は脳に負荷を掛けて直接習得させるわ。副作用で運が悪いと廃人になるけど」

「今、サラッと恐ろしいこと言いましたよね？」

「言ったわよ。でも、当たり前なことでしょう？あなた達が学校で必死になって外国語を勉強する手間を省けるんだから当然のリスクよ。よく言うでしょ、利益はリスクと等価交換で手にするものだって」

アクアの言葉は至極当然のことであった。優奈は心のどこかで無条件に利益を得られると、今日の前にいる神は利益を与えてくれるものだと思っていた。しかし、なんの苦勞もせず、リスクも負わず利益だけを得ようとはおこがましい。何ももたない子供にとってはむしろ破格の条件といえる。

「一通り説明したけど、どうするか決まった？」

「はい。アクアさん、その話受けさせてください」

優奈がそう言うのとアクアは嬉しそうに頷き、カタログの様な物を差し出した。

「ならば選びなさい。一つだけ、力を授けてあげましょう。どんなものでもいいわよ」

優奈がそのカタログを開いてみると【怪力】【防御力超アップ】【名刀マサムネ】：などなど色々な名前が記されていた。どれもこれも強力な力や装備であることは容易に想像できる。この中から選ぶのだが、優奈には気になることがあった。

「すみません、一つ聞きますがアニメや漫画とかの力も選べますか？」
「そういうのもいけるけど、かなり制限がかかるわね。例えばオーマジオウやウルトラマンキングみたいなチートすぎる力。ドラゴンボールやギャラクティック・ノヴァ等の願いを叶える道具、伝説の超サイヤ人ブロリーや黒龍ミラボレアスみたいな強すぎる肉体への憑依、そういうのは許可されてないのよ。実は転生制度を導入し始めた頃にゴジラの肉体を要求した奴がいたんだけど、大変なことになったのよ」

「その人が転生先の世界を滅ぼしたとか？」

「大体そんな感じ。ゴジラの肉体を再現したんだけど、人間への憎しみも再現されちゃったのよ。最近の作品では神みたいに扱われてるけど、初代なんかは核の被害者だから人間を憎んで当然よね。どうしても憎しみを切り離すことはできなかったの。ゴジラという存在が人間に使われることを拒絶して、その人間の全てを喰らいつくした結果ゴジラが誕生して、……その世界は滅んだ。それ以降ね、創作物関連の力への制限が厳しくなったのは」

「身の丈に合った力でないと自分の身を滅ぼす、ということですか」
「だから、あなたが期待している力は難しいと思うわよ。で、どんな力が欲しいの？」

優奈はこの話を聞いてまず思いついた願いを告げた。

「Fateの長尾景虎になりたいです」

制約に反するほどのバランスブレイカーにはならず、自分を変えることができる。優奈にとって画期的な願いだった。

「これなら大丈夫でしょう?」

「これでギルガメッシュとか言い出したらアウトだったけどそれならいけるわね。でも、それだと肉体はレベル1からになるから最初は普通の人間より強い程度だし、宝具も直ぐに使うのは難しいわよ」

「宝具が使えないのですか?」

「使えない、というより強くなるまでは使わない方がいいってこと。長尾景虎の宝具は八人に分身するから情報量の多さで脳がパンクする可能性が高いから、レベルを上げてからの方が安全ね」

「だったら強くなればいいだけですからそこまで問題ではありませんね」

優奈がそう言って自信有り気に笑ったため、アクアもつられて笑った後優奈の足元に魔法陣を出現させた。

「面白いこと言うじゃない。その自信はどこから出てくるのかしら。じつとしといてよ、今から肉体を長尾景虎に変えるから」

魔法陣が輝き出し、その眩しさに優奈は目を閉じた。少し待って優奈が目を開けると変わらずアクアがいるが、先程まで優奈の方が小さかったはずだが優奈の視線はアクアよりも少しだけ高くなっていった。「無事成功ね。ほら、念のためにあなたも確認して」

そう言ってアクアは全身鏡を出現させる。鏡に映った優奈の姿は確かに長尾景虎であった。

「……本当に、長尾景虎になってる……」

「これぐらい私にかかれば朝飯前よ。さて、特典もあげたことだし、早川優奈さん。あなたをこれから異世界へ送ります。魔王を倒すことができればどんな願いでも一つだけ叶えてあげましょう」

優奈の足元に再び魔法陣が現れた。

「長尾景虎と呼んでくれませんか?名前も変えて新しい自分の出発点にしたいと思ってるので」

「……では、早川優奈改め長尾景虎よ!願わくば、数多の勇者候補達の中から、あなたが魔王を打ち倒す事を祈っています。……さあ、旅立ちなさい!」

この物語は勇者候補として異世界へ送られた一人の少女の数奇な運命を追う冒険譚である。

「……アクセル付近でゲートの反応がありました。新たな転生者が送られて来たようです」

「そうか、では今回は君に任せても良いかな？」

「……前回も私が担当したはずですが？」

「ん？そうだったか？別に大した問題ではないだろう。よろしく頼むよ」

「……まったく、あなたという人は」

第二話 身分証明書いらぬのはおかしい

電柱などに遮られない青空の下、広大な草原に景虎は立っていた。山やビルで遠くまで見ることができない日本で暮らしていた景虎にとって、地平線まで見渡せるこの景色は感慨深いものがあつた。振り返ると石造りの巨大な壁に囲まれた街が見える。ゲームによくある始まりの街であろう。景虎はその街に向かって歩き出した。

街の入り口であろう門の付近まで来た景虎は壁の巨大さに圧倒されていた。そんな景虎に守衛の男が話しかけた。

「君は……、見ない顔だな。その槍を見るに冒険者つてところかな？ 駆け出し冒険者の街、アクセルへようこそ。差し支えなければどうしてこの街に来たのか教えてくれないか？」

「冒険者になりに来たんです。でも、外国から来たのでどこで手続きをするのか教えてもらえませんか？」

「冒険者志望だったのか。それなら、この門を通って真っ直ぐ進んで突き当たりを右に曲がれば冒険者ギルドつて看板が見えてくる。そこで冒険者登録ができるな」

「真っ直ぐ行って右ですね。どうもありがとうございます」

「どういたしまして。……冒険者志望か、それにしても良い槍を持つてるんだね」

守衛の視線が景虎の槍に向けられた。駆け出しにすらなれていない素人とは釣り合わない代物なようだ、防具を身につけていることも大きいだろう。景虎は適当にごまかすことにした。

「これは家族が餞別として送ってくれたんです、激励のために」

「そういうことか。良い家族じゃないか。なら、その期待に応えられるように頑張らないとな」

「勿論そのつもりです」

守衛と別れ門を通ると、アクセルの全容が見えてきた。レンガの家々立ち並び、石造りの街道を馬車が通り過ぎて行く。その光景はさながら中世ヨーロッパのようである。違う点は髪の色が様々で尖った耳や獣耳の人がいることだろう。景虎はその周囲をキョロキョロ

と眺めながら冒険者ギルドを目指して歩いて行った。

看板を見つければ右に曲がると、一際大きな建物が視界に飛び込んできた。ここが冒険者ギルドなのだろう。中に入るとまず強烈な酒の匂いが漂ってきた。現在14歳の景虎には慣れない匂いであり、思わず顔を顰めてしまった。よく見ると景虎と同じぐらいの年の人も酒を飲んでいた。日本ではまだ中学生であった景虎が送られるくらいなのだ、成人年齢が日本と大分違うのだろう。昼間から飲んだくれている冒険者から目を逸らし、見渡すと奥にカウンターを見つければ早歩きで向かった。途中、いやに注目を集めていたが、恐らく新参者の珍しさと景虎の容姿であろう。Fateの女性キャラの美貌は異世界でも通用するようだ。受付は四つあり、景虎はその内の彼女と年が近そうな女性職員の列に並んだ。やはり年が近く同性の方が話しやすいと考えたのだ。

やがて景虎の順番が回ってきた。受付の女性はウェーブのかかった金髪で肩が露出したかなり扇情的な服装であった。また、胸が非常に大きい。前世も今も景虎は彼女ほど大きくないため謎の敗北感に襲われた。

「はい、今日はどうぞされましたか？」

「冒険者になりたいんですが外国から来たばかりで何も分からないんです……」

「一つ一つ説明しますので大丈夫ですよ。まずは登録手数料千エリスになります」

登録手数料と言われて景虎は懐を探してみた。すると、小さな革袋が見つかり、その中に1万エリスが入っていたため受付に渡した。

「1万エリスですね、こちら9千エリスのお返しになります。……では、冒険者になりたいと仰るのですから理解しているとは思いますが、簡単な説明を。まず、冒険者とは基本的にモンスターの討伐を請け負う仕事ですが、何でも屋と考えてください。そして、冒険者には職業というものがございません。こちらのカードをどうぞ」

受付はそう言っただけでカードを景虎に渡した。

「このカードは冒険者としての身分証明書にもなりますのでなくさな
いようにしてください。このカードには職業、レベル、ステータスな
どの冒険者の基本情報が載っています。このレベルについてですが、
ご存知の通りあらゆる存在は魂を秘めています。生物を殺したり食
べたりすることで魂の一部を経験値として吸収します。経験値が貯
まるとレベルが上がり、急激に成長するわけです。レベルが上がると
ステータスが上昇し、スキルを覚えるためのポイントを得られます。
是非頑張つてレベルを上げてください。それではこちらの書類に名
前と生年月日の記入をお願いします」

差し出された書類に景虎は必要事項を記入していった。

「はい結構です。ナガオカゲトラさん、ですね。ではカゲトラさん、こ
ちらのカードに触れてください。ステータスが表示されるので数値
に応じて職業を選んでください。職業は後から変更することも可能
ですので、難しく考えなくて大丈夫ですよ」

景虎がカードに触れると青い光が放たれた。一瞬、頭の中をを覗か
れた気がしたが、その違和感もすぐに消えた。

「……はい、ありがとうございます。……おお！全体的にバランスよ
く高水準に纏まっていますし、特に敏捷は平均値を大幅に超えていま
すね。高い魔力が必要なアークウィザードは厳しいですが、それ以外
なら殆どの上級職に就けますよ。といつても、カゲトラさんはもう決
まっているようなものですが」

受付はそう言って景虎の持つ槍を見た。それに景虎は当たり前だ
と言うように頷いた。

「このランサーでお願いします」

「カゲトラさんの敏捷の高さと相性が良いですし強力な前衛職です
よ。では、ランサーで登録しますね。カゲトラさん、冒険者ギルドへ
ようこそ。今後の活躍を期待しています。……早速なのですが、カゲ
トラさんには一つクエストを受けてもらいます。といつても、ガイダ
ンスの一環なので駆け出しの方でも達成できる難易度になっていま
す。クエストはジャイアントトード5匹の討伐です。基本的にレベ
ル10以上の冒険者の付き添いの下で受けてもらうのですが……」

「それなら私に任せてもらえないかな？」

受付の説明に割り込む形で声がかけられた。景虎が振り向くと、そこにいたのはつい先ほど会った人物であった。

「さっきの守衛の人……」

「これでも冒険者を持っているからね、監督役は十分務まるはずだよ。ルナさん、どうだろうか？」

受付―ルナという名前らしい―はその提案に笑顔で答えた。

「全然問題ありません！あなたほどの実力なら安心して頼めます！カゲトラさん、この方は本当にすごいんですよ！守衛の仕事をしていることが多いですが、冒険者としても凄腕なんですよ……」

ルナが興奮して解説しているあたり、この守衛の実力の高さがうかがえるのだが、興奮のあまり最初の凄腕であることしか聞き取れないほどの早口であった。景虎は知らなくても問題ないと判断し、いまだに解説しているルナを放っておくことにした。

「長尾景虎、だったね。ビシバシ指導してあげるから覚悟したまえ」

「えつと……、よろしくお願いします？」

「すまんすまん、冗談だ。そんな厳しいものじゃない、緊張しなくて大丈夫だ。ま、気楽にやろう」

「は、はあ……」

ガハハツと笑う守衛に景虎は困惑の声を漏らす。こうして景虎はただの気の良いおじさんにしか見えない守衛の男と初めてのクエストに挑むのであった。

「この方はギルドの重要ポストにも就いていて、本来私なんかでは会えもしない人で……」

「……ルナさん、もう行っちゃいましたよ」

「……あ!？」

第三話 殺しを誇れる訳がない

「そういうえば、まだあなたの名前を聞いていないのですがどう呼べばいいですか？」

景虎は監督役の守衛に尋ねた。二人は臨時で組んでいるが、自己紹介すらしていない。守衛が冒険者登録の場に居合わせたため景虎の名前を一方的に知っているだけだった。

「ん？……ああ、そういうえばまだ名乗っていないかったか。……ナカジマ、と呼んでほしい」

まるで日本人のような名前だ、景虎はそう言いそうになったが、こらえた。この世界の人間の名前に日本風のものがないと決まったわけではない以上この守衛が転生者だという確証もない。不用意な発言で疑われることは避けるべきである。

「……ナカジマさんですか。ではナカジマさん、今回の討伐対象のジャイアントトードはどんなモンスターなんですか？」

「文字通り巨大なカエルだね。人間ぐらいなら丸呑みできるくらいだね。攻撃手段は飛びかかる、舌を伸ばして捕まえるといった単純なものだ。動きもかなり鈍いから観察すれば対処法はすぐにわかる。注意するのは肉質が非常に柔らかくて打撃が効きにくいことだね。まあ、拳闘士のような職業でない限り大抵は武器を持つからそこまで問題ではないかな。後は、奴は金属を嫌うから防具があれば殆ど狙われないことぐらいか。……ほら、見えてきたぞ」

ナカジマが指し示した方向を見ると、ジャイアントトードが元気に跳ね回り、更に地中から続々と這い出して来て体に付着した土を振り落とししていた。

「やけに元気ありますね、あのカエルたち」

「今は春だからな、冬眠から目覚めたばかりで腹を空かして気が立っているんだろうな。多少厄介だが問題ないだろう、行ってこい長尾君」

通常よりも危険であるにも関わらずナカジマは躊躇なく景虎を戦場へと放り込んだ。カエルが景虎に気付いたため、景虎は一瞬ナカジ

マを恨めし気に睨みカエルと対峙した。

ジャイアントトードは金属を嫌う、そのため景虎は勢い良くカエルに向かって突撃していった……のだが、カエルは景虎へ勢いよく舌を伸ばしてきた。

「なっ……！」

景虎は咄嗟に横に跳ぶことでその舌を回避した。今のは明らかに景虎を捕食するための行動、つまり金属を嫌うという前提が早くも覆されてしまったということだ。

「ナ、ナカジマさん！普通に食べられそうなんですけど！」

「あー、腹を満たすことが最優先で金属を気にしてられないのかもしれないな。金属は苦手だけど弱点ではないからね」

「それは闘う前に教えてほしかったんですけどね！」

つまり、冬眠から目覚めたばかりの生き物が危ないのはどの世界でも同じということだ。だが景虎のやる事に代わりはない。幸い舌の速度は見てからでも反応できた。勝てる、景虎はそう確信しカエルへと走り出した。カエルも景虎を捕らえるべく再度舌を突き出す。

「それはもう効きませんよ！」

槍で舌を弾きカエルの懐へと飛び込んだ景虎。そして、

「ハアアアアッ——！！！」

一閃、横なぎに振るわれた槍がカエルの腹を切り裂いた。血しぶきを全身に浴びながら景虎はカエルの頭に槍を突き立てる。カエルの絶命を確認することもなく別の個体へと向かい、斬る、また別の個体を斬る、斬る、斬る……、機械的に、何かを抑えこむように景虎はカエル達を斬り捨てていった。

「……終わったようだね」

そこはカエル達の死体で溢れかえっていた。ナカジマは髪、服、そして槍と全てが血で染まった景虎へ歩み寄る。景虎の顔は赤く染まった周囲とは対照的に真っ青であった。

「初めてのクエストはこれで完了なわけだがまずは休むといい」

そう言つて景虎の肩をたたく。直後、景虎はその場に蹲り、嘔吐した。鼻をつく臭いが辺りに広がる中、ナカジマは景虎を試すかのように見つめた。

「うっ、うぐっ、おええっ……」

「長尾君、落ち着いてからでいい、今の君の気持ちを教えてほしい。口にださないことには何も始まらない」

「……はつきり言つて気持ち悪いです。この血の臭いも、色も、斬つた時の感触も全てが気持ち悪い。これが罪悪感なのか嫌悪感なのかもわからないんです……」

「……生き物を殺した時の気持ちを理解してこそその冒険者だ。しかし、最近では殺すことに対して忌避感を抱かない輩もいる。命をもらうということがわかっていないとも言えるんだ。そんな者は冒険者以前に人として失格だ。……確かに君はこうして生き物を自分の手で殺した」

景虎は俯き手を震わせている。

「……………」

「だがその意味を理解している。命の尊さ、君はそれを知っている。冒険者として、今もらった命を無駄にしたくないのなら立ちたまえ」
「……入社試験、ですか。随分と周りくどい方法ですね……」

「結果的に騙すことになったのは謝ろう。しかし、こうでもしないと冒険者の心構えを説けないのだ、それをわかっていない若者が増えているからね」

「私も今になって身をもって実感しましたよ。ナカジマさん、冒険者として暮らしていくにはずっと向き合えないといけないんですよね？」

その言葉には先程までの悲壮感はなく、何かを決意したようであった。

「その通り。だが、人は皆その罪を背負っているんだ。冒険者が顕著なだけでね」

「今更逃げるつもりはありません。命をもらい続けなければいけない

のなら、それを全て背負ってみせます！」

顔は青いながらも景虎はしっかりと立ち上がった。この適応の速さは彼女自身の気質か、長尾景虎という戦場に立ち続けた者の体の影響か。

「うむ、これで君も晴れて冒険者だ。改めて、ようこそ長尾景虎君。……この後はギルドへ報告に行くのだが、……報酬を受け取ったら直ぐに大衆浴場に行くといい。その姿で街中を歩くのは物騒だからね」
現在、景虎は全身がカエルの返り血で染まっている。乾けば固まってしまい、臭いも取れにくくなるだろう。早急に洗う必要があった。

ナカジマが気を遣い報告よりも先に浴場に行つてこいと入浴代を渡したため、景虎は大衆浴場に来ていた。大衆浴場は日本の銭湯と殆ど同じであり景虎以前の転生者が伝えたのだと推測できるが、この似ているようで何処かズレている様は『テルマエ・ロマエ』でルシウスが建造した浴場を彷彿とさせた。……尤も若くして死んだ者が送られるのだから専門家と呼べる人材がおらず、正確な姿が伝わらないのは当然のことである。

大衆浴場では別料金になるが洗濯もしてもらえらしく、景虎は装備を預け、貸し出されていたタオルを持って浴場へと入って行った。体を洗い、湯船に浸かると自然とため息をつく。景虎は風呂というものはこれほどまでに人を癒すことが出来るのか、と感激していた。日本にいた頃は当たり前のことで忘れてしまっていたのだ。

しばし微睡んでいると、景虎の隣にやって来る者がいた。

「すみません、寝そうになってますけど大丈夫ですか？」

「……んあ、……あれ？私寝てました？」

「はい、バツチリ寝てましたよ」

茶色の髪に青白すぎる肌の隣の女性は欠伸をする景虎を見てクスクスと笑う。

「そうだったんですか、申し訳ありません」

「いえいえ、それよりもあなた、冒険者ですよ？それも駆け出しの」
景虎はこの女性が一瞬で見抜いた事に驚き僅かに目を見開いた。

「その通りですよ。わかるものなんですか？」

「私もかつては冒険者でしたから大体の実力はわかるんです」

「そういうものなんですか？」

かつてということは既に引退している筈だがこの女性は二十歳くらいにしか見えない。アンチエイジングでもやっているのかと思っただがそれを言っただけはいけないと景虎は直感した。

「そういえば、お名前は？」

「そうでした。私はウイズと申します」

「ウイズさんですね、私は長尾景虎です。景虎と呼んでください」

「カゲトラさんですか、もしかして二ホンから来たんですか？」

「日本を知ってるんですか？」

意外な所で日本という単語が出て来たため景虎は考え込む。他の転生者が日本という異世界の国から来たなどと馬鹿正直に喋ってしまったのではないかと心配になったのだ。だが、それは杞憂だった。「名前を聞いたことがあるだけですけどね。なんでも紅魔族のように独特な名前の人が多いらしいです、丁度カゲトラさんのように。他には凄いや道具をもっていて冒険者として名を上げる人が多いとも」

「私が日本人なのは確定なんですね」

「カゲトラさんの様な珍しい名前の人は滅多にいませんから」
日本でカタカナの名前が目立つようにどうしても日本人は目立つてしまうようだ。

「ウイズさんは元冒険者と言っていましたけど、今は何をされてるんですか？」

「この街でウイズ魔道具店というマジックアイテムの店をやっています。来てくださったらお安くしますよ」

「道具が必要になったら利用させてもらいますね」

その後ウイズと世間話をしていたため大分時間が経ってしまったことに気付き、景虎は立ち上がる。

「そろそろ上がらないと。人を待たせてますし」

「なら私も上がります。こうして出会った記念に牛乳でもおごりますよ」

そうして二人は風呂から上がった。そしてウイズが牛乳を買って来てくれたのだが、すっかりフルーツ牛乳であった。確認するとコーヒー牛乳やラムネまで売っている。正確に再現されているわけではないが、先人たちの風呂への拘りが十分に感じられる。ここまで風呂を求めるあたり日本人の風呂好きは筋金入りである。

景虎は片手を腰に当て一気にフルーツ牛乳を飲み干した。牛乳に果物の加重が加わった官能的な風味、火照った体に染み込む冷たさがたまらない。

「ああ、美味しい。こういうのは一気に飲み干すのが楽しいんですね」

「ふはあく、ちよつと勿体無い気はしますが一気飲みも美味しいですわね」

フルーツ牛乳を飲み干し、大衆浴場を出た二人。景虎は冒険者ギルドへ、ウイズは自宅へと向かうためここで別れることとなる。

「会ったばかりなのに色々とお世話になりました」

「こちらこそ付き合ってもらってありがとうございます。お店にも来てくださいね。それでは失礼します」

帰って行くウイズを見送り、冒険者ギルドへと向かった景虎はギルドの中で待つてくれたナカジマと合流した。

「ナカジマさん、お待たせしていません」

「私も後片付けで忙しくてさっき来たところだよ。受付を待たせてしまっていることだし報告を済ませようか」

受付で依頼書と冒険者カードを渡し、確認をすればクエスト完了である。因みに冒険者カードは身分証明だけでなく、討伐したモンスターも記載されていた。カードの討伐欄に入りきらなくなったらどうなるのか気になるところである。

「これにてガイドランスは終了、そしてこれが報酬金二万五千エリスになります。カゲトラさん、ナカジマさん、二人ともお疲れ様でした」ルナから報酬金が入った袋を受け取る。働いてお金を稼いだ、この

初めての経験に景虎は固まってしまった。

「……これ、本当に私がもらえるんですか？」

「間違いなく君が働いて得たお金だ。働くというのは大変だがその分達成感がある。学校では味わえない体験だろう？」

「はい……凄く嬉しいです」

ガイドンスが終了した景虎は馬小屋で横になっていた。馬小屋までの道中には宿泊施設がかなりあったが、ナカジマの話では冒険者は一般的に馬小屋で寝るものらしく、既に多くの冒険者が馬小屋に入っていた。宿泊施設も使えるが、毎日泊まれば宿泊費はばかにならない。

ところで、アクセルには宿泊施設が多い。それもそのはず、この世界では定住する者が日本よりも少ないのだ。冒険者は言わずもがな行商人が多い。陸路で物資を輸送する場合、この世界では馬車が常識であり商人は馬車に乗って街から街へと移動するのだ。テレポートの魔法もあるにはあるが習得できる者は少なくテレポータ屋は値段が高い。毎回レポートを利用していたら大赤字だ。冒険者も特定の街を拠点としない限り移動し続ける。結果、宿泊施設が増えるわけだ。実はアクセルはこれでも少ない方でこの国ベルゼルグの王都は宿泊施設ばかりである。

景虎はそういった事情は知らない上に現状に不満はない。それが普通なのだから受け入れるだけである。

「今日は本当に濃い一日でしたね……。また……明日も……頑張ろう……」

異世界生活初日から沢山の出来事があり、その疲れからか景虎は直ぐに寝入ってしまった。そうして夜も更けていった。

第四話 怪奇！空を飛ぶキャベツ

初日以降、景虎は毎日クエストを受注、そしてクリアしており、冒険者としての暮らしに少しずつ慣れてきていた。そして現在……

「「キャベツキャベツ！」」

「「うおおおおおっ!!」」

「……私は何をやってるんでしょうか」

……数多の冒険者たちと共に空を飛ぶキャベツを追い掛け回していた。日本どころか地球では有り得ないイベントに景虎が参加した経緯はこの日の朝まで遡る。

『緊急クエスト！緊急クエスト！街の中にいる冒険者の皆様は、至急冒険者ギルドに集まってください！繰り返し返します。』

朝の日課としてラジオ体操をしていた景虎の耳に飛び込んできた緊急のアナウンス。初めての出来事に景虎は驚き、ラジオ体操を中断、身支度を整え急いで冒険者ギルドへと向かった。

緊急というだけありアクセルの冒険者はほぼ全員がそろっていた。景虎は何か大事件が起こったのではないかと身構えているのだが周りの様子がおかしい。見てみると、嬉しそうな表情で今か今かと待っている。困惑する景虎をよそにルナが説明を始めた。

「皆さん、突然のお呼び出しすいません。もう既に気付いている方も多いでしょう。そう、キャベツの収穫時期がやって参りました！今年にはアスパラガスを始め他の野菜も多数確認されています。買い取り価格はキャベツが1万エリス、アスパラガスが5千エリス、その他の野菜は3千エリスです。逆襲に遭い怪我をしない様お願い致します。それでは、春の収穫祭の始まりです！」

ルナの開始合図と同時に外へと飛び出して行く冒険者たち。彼らについて行った景虎が見たのは辺り一面が緑色に染まった街だった。

キャベツが飛び回り、地中からアスパラガスが飛び出し、豆が飛び跳ねる、有り得ないと思うだろうがこれは現実である。

景虎は頭痛を我慢し、キャベツを叩き落すべく槍を振るうのだが、このキャベツたち、意外と動ける。横なぎに振るわれた槍の風圧を利用して上昇するという芸当まで見せた。

「キャベツのくせに何でこんなに器用なんですか！このっ！」

「キャベキャベ♪」

「馬鹿にしてー！」

「嬢ちゃん、闇雲に振っても当たんねえぞ！こんな風に真っ直ぐに突くんだ！」

そう言っただけ近くにいた冒険者が剣を真っ直ぐに突き出した。キャベツはそのまま真っ二つに割れ地上に落ちて動かなくなった。それを確認した景虎は槍を真っ直ぐに突いていく、

「初めてですよ……こんなにもコケにされたのは……絶対に許しませんよ！狩り尽くしてあげますから覚悟しなさい！」

散々挑発された鬱憤をはらすように景虎は槍を振った。そうしてキャベツを収穫していたのだが、突如景虎の足下が揺れた、咄嗟に飛び退くと先ほどまで景虎がいた場所から緑色の棒が突き出て来た。出て来たのは異様に大きいアスパラガスであった。アスパラガスたちは次々と地中から飛び出し、ミサイルのように突撃してきた。速度は中々だが直線的な動きしかできていない。景虎は体を横に捻りアスパラガスを叩き落としていく。キャベツ、アスパラガスと連続で襲撃してきたため冒険者たちも流石に疲れて来たが野菜たちの進撃はまだ終わっていないかった。

急に太陽の光が届かなくなり辺りが暗くなっていく。何事かと見上げると絨毯のような何かが太陽の光を遮っていた。

「上から来るぞー！気をつけろー！」

冒険者の内の一人の警告と同時に絨毯のようなものが降ってきた。よく見るとそれは小さな粒の集まりで、機関銃の弾の如く地上へと落下してきた。景虎は頭部を庇いながら建物の陰に逃げ込みやり過ぎた。穴だらけの地面を見ると、緑色の物体が大量に埋まっている。

る。手にとつてみると、それは豆であった。さやえんどうやそら豆といったよく知る物ばかりである。そんな豆たちの襲撃に呼応するように大量の野菜たちが飛んで来た。

「よし、あと少しだ、気合い入れろよ！」

「どういうことですか？まだまだ沢山来てますよ？」

「さつきみたいに豆が特攻してきたってことは野菜たちも大分数が減っている証拠なんだ。少しでも多くの野菜を通すために豆が足止めをする。そら、次が来るぞ！」

冒険者の説明が終わると同時に豆たちが突撃してきた。その様子からは不転の覚悟が感じられた。野菜に覚悟があるのかなどと考えてはいけない。

野菜と冒険者の採集決戦は夕方まで続くのだった。

夜になり採集決戦から帰って来た冒険者たちは冒険者ギルドにて宴会を開いていた。野菜の買い取りは既に済ませ、得たお金で飲めや歌えやの大騒ぎ。そんな中、景虎は一人でお茶を飲んでいて。景虎は現在14歳、この国ベルゼルグでは成人年齢であり婚姻も飲酒も可能である。しかし、これまで日本人であった景虎には抵抗感があった。お茶だけ飲んで早く帰ろうと決めた景虎だがそう上手くいくわけがなかった。酔った女性冒険者が景虎を見つけ千鳥足で近づいてきた。「カゲトラちゃん、そんなところで一人とか寂しくない？みんなで飲もうよほら」

「いや、私はまだ14歳ですから、お酒はちよつと……」

「なーに言ってるの！全然大丈夫じゃん！ほら、さつさと行くよ。みんな、カゲトラちゃんを引っ張るの手伝って」

「「はーい」」

「話を聞いて！?って皆さんも乗らないで！」

景虎に抵抗する隙を与えず一致団結した女性冒険者たち。彼女たちは引っ張って来た景虎の前に酒が注がれたジョッキを持ってきた。

「……これ、ちよつと多過ぎませんか？」

「大丈夫大丈夫、ほらググつといつちやつて！」

周りを囲まれたため逃げることはできなかった。もうどうにでもなれ、景虎は半ばヤケクソ気味に酒を一気に飲み干した。一気飲みは体に悪いという話を飲んでから思い出した景虎だが、気分が悪くなることはなかった。むしろ、今まで足りていなかったものが埋まるようによくなじんだ。そこから景虎はひたすらに飲み続けたのだが景虎が酔うことはなかった。おそらく長尾景虎は大酒飲みであるという有名な話をアクアが参考にしたのだろう。店の酒を飲み干す勢いの景虎に触発されて周りも己の限界に挑戦し始め、この大騒ぎは深夜まで続いた。

翌日、景虎はいつも通りに朝の体操を終えて、冒険者ギルドへとやって来た。しかし、ギルドはいつもと違い閑散としていた。冒険者たちは二日酔いや採集決戦で大金を得たからといった理由で大半が来ていなかったのだ。少しでもお金を貯めるといふ発想はないのか、と呆れながら景虎はクエストボードを確認した。……この世界の冒険者でお金を貯める者は殆どいないことは事実だが、その原因の一つの厳し過ぎる税制を景虎はまだ知らない。話を戻し、クエストボードを確認していた景虎だが、ある依頼が目にとまった。

ゴブリンの討伐依頼。ゴブリンとは日本でもスライムと並んで有名な雑魚キャラであり、妖精の一種と言われている。弱い上に報酬は中々であるためおいしい依頼である。景虎は早速依頼を受け、目的地へと向かった。しかし、

「最近、初心者殺しが目撃が多発しているので注意してください」

初心者殺しというモンスターを知らない景虎はその情報を聞き流してしまった。

目的地である山道に到着した景虎。木の陰に隠れながら少しずつ進んで行くと、何やら話し声らしき音が聞こえてきた。

「ギギツ、キーツ」

「ギヤー、ギヤーツ！」

緑色の体色に簡易的な衣類と武具、ゴブリンの集団である。景虎ではわからないが先ほどの声はゴブリンの固有の言語である。敵がすぐそばに来ているとは思っていないのか緊張感もなくだらけている。景虎は飛び出し、一息にゴブリンの内の一匹を貫いた。

「ギヤツ……」

「ギーツ!?ギギヤー！」

ゴ布林たちは仲間が突然死んだことに驚きながらも景虎の姿を確認するや否や景虎を取り囲んだ。後方のゴ布林が矢を放った。しかし、景虎がしゃがんで避けたため矢は向かい側のゴ布林に突き刺さってしまった。

「事前の打ち合わせもなくそんな事をすればそうなるのは当たり前ですよ……、ハアツ！」

後ろから斧を持って突撃してきたゴ布林を振り向きざまに切り捨て走り出す。その進路上にいたゴ布林は急に走って来た景虎に怯え一瞬動きが止まる。景虎はそのゴ布林を踏み台にして跳び、群れの後方に着地した。ゴ布林たちは景虎の動きに反応できず、狼狽えながら必死に隊列を整えようとしていた。だが、遅かった。景虎は群れに襲い掛かり、ゴ布林を片っ端から切り捨てていった。

「無事に終わったのはいいですけど、どうしてゴ布林たちは急に山道に現れたのでしょうか？」

ゴ布林を狩り終えて戻る途中の景虎はそのことが気になっていた。ゴ布林たちがどうぞ発見してくださいと言わんばかりに山道に集まっていたこと、更にはあの連携の拙さ。ゴ布林も馬鹿ではな

い、先ほどの杜撰な連携はやはり不自然であった。まるで何かに追い立てられたかのような……。

先ほどまでの違和感により周囲を警戒していた景虎は視界の隅に黒い影を見つけた。その放つ殺気はそれがこれまで戦ってきたどの相手よりも凶悪な存在であることを否応なしに理解させた。黒い体毛に覆われた巨体、鋭利な爪と牙……初心者殺しであった。

第五話 勝ち目が薄いぐらいが丁度いい

今の私では勝てない、景虎の本能が大音量で警告を発しその直後に景虎がとった行動は離脱であった。

既に依頼は達成しており、わざわざあんな相手と戦う必要はなかった。

しかし、初心者殺しはそれを許さなかった。逃走する景虎を追いかけて来たのだ。その速度は敏捷性が売りのランサーたる景虎を上回り、徐々に距離は縮まっていった。

「グオオオッ！」

初心者殺しが跳びかかった。

景虎は振り向く暇もなく直感で横へ跳んだが肩に初心者殺しの爪がかすり、ゴロゴロと地面を転がっていく。即座に立ち上がったが、初心者殺しも既に景虎に向き直っていた。景虎の肩からは血が垂れている。

「……………」

逃げても追いつかれる、正面から立ち向かっても勝ち目はない、万事休すか、と景虎は諦めかけていた。

……いや、ある。一つだけ勝てる方法が。

そのための準備をする時間はない、だがやるしか景虎が生きて帰る道はない。

景虎と初心者殺しの睨み合いが続く中、景虎が姿勢を低くして構えた。初心者殺しはその動きに反応し爪を広げて跳びかかった。それは景虎が望んだ通りの動きであった。

景虎は横に跳び初心者殺しを躲す。着地し振り向いた初心者殺し、その目に小さな粒、砂が飛び込んできた。

「ギャオオッ!？」

「油断大敵……………ですよ」

予想だにしなかった痛み初心者殺しがのたうち回る。しかし、景虎は攻撃することなく走り出した。

単に逃げた訳ではない。目つぶしによる足止めはあくまでも時間稼ぎ、本命はここからである。

目的地へと走る途中、景虎は沼地に差し掛かった。景虎は周囲を確認しぬかるみを見つけると、そこに頭から突っ込み、泥を浴びた。全身泥まみれとなってしまうが少しでも匂いを消すためなのだ、身なりを気にしてている暇はない。

「……こんなに汚れるなんて……洗濯代もばかにならないのに……全部あの黒豹のせいですよ」

……いや、すっかり気にしていた。

そして、景虎は目的地、ゴ布林たちと戦った山道に再びやって来た。辺りにはゴ布林の血肉が散乱し異臭を放っている。ここで特に準備は必要ない。初心者殺しを待つだけである。

チャンスは一度きり、失敗すれば……死ぬ。初心者殺しから向けられた殺気を思い出し震える手を押さえつけ、景虎は敵を待ち構えた。

辺りの雰囲気が変わった、実際には何も起こっていないが景虎はそう感じた。山道に侵入する黒い影、初心者殺しである。微かに残った景虎の匂いを辿ってきた初心者殺しだが景虎が見つからず辺りを見回している。ゴ布林たちの死肉が食欲を刺激し口からは涎が溢れ出ている。

空腹に耐えかねゴ布林たちの肉に近づく初心者殺し。頭がいいとは言えども獣であることには変わりない。見つからない獲物と目の前にある肉、二つを天秤にかけた結果目の前の肉を優先した……してしまった。

ゴ布林の肉を食べ始めた初心者殺し、その背後で何かが着地した音が響いた。その音に反応し振り返った初心者殺し……その腹部に

槍が突き刺さっていた。

何が起こったのか理解できず一瞬間の抜けた表情を見せた初心者殺しは襲ってきた激痛にのたうち回った。

「ギャオオオオ!？」

初心者殺しに刺さった槍を押し込もうとする人間……景虎である。景虎は先ほどまで木の上で隠れ続けていたのだ。無論ただ木に登っただけでは即座に見つかっていただろう。景虎の徹底的匂いを消しておいたからこそ、奇襲を可能としたのだ。

もがき暴れる初心者殺しを景虎は必死に押さえつける。

しかし、景虎と初心者殺しでは単純な力に差がありすぎた。少しずつだが初心者殺しが押し返していく。そして……

「ガアアアアアッ!」

「っ……!　ぐっ……」

景虎が弾き飛ばされ、槍も抜けて地面に転がる。何とか立ち上がったものの槍は手元になくこの距離では逃げることもできない。

景虎は拳を握り最後まで抵抗する意思を見せつける。

その行動を受け初心者殺しが景虎に跳びかかる……ことはなかった。力なく倒れていく初心者殺し、その胴体からは大量の血が流れつづけている。景虎の槍は初心者殺しの臓器に刺さっていたのだ。刺さり続けていたからこそ栓の役割を果たし出血しなかった。

初心者殺しが動く気配はない。完全に死んでいた。その事実を確認し緊張の糸が切れた景虎はその場に座り込んだ。体力以上に精神的な疲労が溜まってしまっていた。命にかかわる戦いはこれが初めてだったのだ、仕方がないだろう。

景虎は日が傾き始めるまで休憩を取り、報告をするために冒険者ギルドへと帰還していった。

「……本当に死ぬかと思いましたよ」

「それでも、もう初心者殺しを討伐してしまうなんて凄いいじゃないですか！」

景虎の帰還後、ギルドはお祭り騒ぎとなっていた。景虎のような駆け出し中の駆け出しが初心者殺しを討伐したのだから当然のことではある。景虎は疲労のため宴会には参加せず、銭湯で汗を流し、馬小屋に着くとそのまま眠ってしまった。そして今日はこうしてウイズとその報告兼世間話をしているのである。

「身体能力は鍛えるとして、技術がどうしようもないですよね。」

「……ウイズさんが何か教えてくれませんか？」

「私はアークウイザードですからね……カゲトラさんが参考にできるようなことは教えられないかと……」

申し訳なさそうに告げるウイズ。わかっていたことではあるが、やはり残念である。景虎が思うにウイズは強い、それも桁違いなほどに。一見穏やかそうではあるが、所々に強者のオーラの様なものが感じられる。

「やっぱりそうですか。ウイズさんは真正面からの殴り合いも強そうだと思いますけどね」

「ま、まあ冒険者は鍛えてなんぼなところはありますし……。というか前衛職の方から教わるのはどうですか？」

「それも考えましたけど皆さん技術よりもいかに速く当てるかを重視して目指す方向性が違うんですよね」

冒険者は特例を除き対人戦をすることは無い。したがって剣術の様に対人を想定した技術を必要としない傾向がある。対人戦用の技術であってもモンスター相手に役立つであろうが、そもそも景虎の様なソロでない限り仲間との連携を磨く方が効率的であることも大きい。

「……でしたら一人紹介しましょうか？剣士で物凄く強い人を知っているんです」

「是非お願いします！その人はウイズさんの冒険者時代のお知り合い

でしょうか?」

「え、えーと、……知り合いというか同僚というか……」

ウイズの同業者ということは恐らく何かしらのサポートアイテムを売る仕事に就いているのだろう。景虎はそう判断した。引退していても強いウイズという前例がいるため疑問を持つこともなかった。

「その人の名前は何というんですか?」

「ベルディアさんといいます。悪い人ではないですよ。……ちよつとセクハラをしますけど」

「それ大問題じゃないですか」

景虎には会う前からベルディアという人物が胡散臭く思えてしまった。

「ま、まあ戦闘力と指導力は本物ですから。それではベルディアさんには私の方から連絡しておきますね。あの人は人前に入るのが苦手ですから街の外になりますけど」

「それよりもウイズさんはセクハラされてませんよね?」

「それなら大丈夫です。覗かれたら氷漬けにしていますから」

ごく自然に恐ろしいことを言つてのけるウイズ。普段はふわふわした印象があるが元アークウィザードなだけはある。

「ベルディアさんと連絡がついたら追って報告しますね」

「ありがとうございます。では、また寄らせてもらいますね」

「お土産に何か商品でも……」

「それは結構です」

そそくさと退散していく景虎。ウイズには世話になっているがあの商売センスだけはどうしても理解できないのであった。